



東 京 都 私 立 幼 稚 園 協 会

創立二十周年をむかえて

笠 原 秀 定

本年は東京都私立幼稚園協会の創立二十周年を迎えることとなつた。たつて見ると、随分早いものだという気もするが、過去をふりかへて見ると、其の間の色々な事が、次から次と走馬灯のように思い出されてくる。

協会が現在のように強力なものになるまでには、先覚者たちの非常な苦勞と、努力のたまものであることを忘れることは出来ない。

日本に於ける幼稚園の創設は、明治九年に当時の東京女子師範学校（現在のお茶の水女子大学）に附屬されて出来たので、本年はち

ようど八十周年になるわけであるが、明治十二年には、私立幼稚園が東京の芝公園に設立されたのである。初期の頃は何といつても、国公立が多く、明治四十五年の全国の統計を見ても、官公立二二四園に対し、私立は二〇九園に過ぎなかった。それまでは私立幼稚園はあまり発達しなかつたようである。それには色々な原因もあるが、幼児教育の重要性が、一般的に認識されなかつたことと、幼稚園は一部有産階級の家の子の就学前の教育の如く感ぜられ、貴族的体臭が強かつたためであろう。又教育行政の面でも、幼稚園は

傍系の教育機関として、まま子扱いをされ、教育局でも余り指導もされず、放りばなしのような状態で、各々が独自の道を歩んでいたというのが実状であったためだろう。

然し大正十五年には始めて、幼稚園会なるものが公布され、幼稚園に初めて法令が出来た。東京都の私立幼稚園も、昭和になってから、段々その数を増して来て百余園の施設が出来、昭和十年頃には、急激に増加し、一躍その倍に達し、二百園を超える数となったのである。従って東京都の保育界に占める私立幼稚園の地位は、数の上から実に強大なものとなったのである、然しながら、各園の間に於ては、何の連絡もなく、又親睦の機関もなく、個々ばらばらの存在であったので、心ある者は、連絡の機関を作るためによりより話し合いをしていたのである。

私立幼稚園の園長には、宗教家あり、学者あり、政治家あり、夫夫一城の主が揃っており、各々おえらい方がいたので、心を一つにして団結することは仲々至難なことであった。

然し連絡機関の必要を感じる者も、段々増加し、その意慾も高まり、いよいよ昭和十二年にはその機も熟し、連盟結成の相談会がもたれ、翌年二月四日には、東京府私立幼稚園連盟創立委員会が本所幼稚園で開かれ、同三月一日を期して、お茶の水の佐藤生活館で結成式をあげ、長い間の待望であった団体結成の孤々の声をあげたわけである。その時の会長は三戸敬光氏、副会長は和田実氏、常任理事には内山憲尚氏、山田勇氏になった。以来後員の努力により断次

発展し、昭和十七年には三百余園が更に強き団結の下に、名称も東京都私立幼稚園と改め、会長には、東京都の当時の学務部長加藤初夫が推薦され、幼児教育の向上のため邁進することとなった。

思えば実に長き胎動であり、輝やかしき誕生であった。当時の先覚者の努力は、なみ大底のことではなく、その業績は、実に大きなものがある。何年に於ても同じであるが、開拓者の努力は容易のことではなく、この功績は互に忘れてはならないことである。

かくして東京都私立幼稚園協会も、ようやく軌道に乗り活潑に動き始めたのであるが、当時始められていた世界戦争は、益々苛烈になり、戦禍も拡大するに及んで、遂に昭和十九年には、緊急措置令と称する、幼稚園休園命令が出され、幼稚園は休園の止むなきに至り、又教育団体統制のため、本協会も解散を命ぜられることとなり、漸く私立幼稚園の一致団結の貴い機運が乗って来た時に、戦争の復興を希望するの声となった。十月十六日に中野感応幼稚園で準備会が開かれ、十二月一日芝の明德幼稚園に、創立総会を開いた、会する者二十数名、会則の審議、決定、続いて役員選挙に移り、理事長内山憲尚氏、常任理事青柳義智代氏、加藤武夫氏、櫻葉勇江が選出され、事務所は中野区宮前町四八に置くこととなった。

という記事を見る時、その当時は忍ばれ、現在七五〇園を数える隆勢を思い、感慨無量なものがある。

戦後は民主主義国家となり、学校教育法が公布されるや、幼稚園はその第一条の学校として取扱われることとなり、続いて私立学校

